言語･聴覚･脳機能について理解しやすい科目配置

言語、聴覚、嚥下に加えて、認知症や発達障害に対する言語聴覚療法についても、医学的知見に基づいた幅広い知識が学修できるよう系統的に科目を配置しています。

在学生のコメント

中島　康平 さん（東洋大学卒）
言語聴覚専攻科　2年

症例をもとにした実践的な講義。修得した知識を、すぐに実践できる充実した環境です。

１年次の前期では、解剖学や内科学など言語聴覚士に必要な医学的な知識を身に付けるための講義が中心です。後期になると演習科目が増え、症例の情報から患者さんの状態を分析するなど前期で身に付けた知識を実際に使う機会が増えてきます。

印象的だった授業は、「成人言語障害学演習」の授業です。言語障害を抱える症例の情報をもとに患者さんのコミュニケーションの状態を把握し、目標を達成するためにはどのような方法で訓練を行うべきかを学生間で一から考える実践的な講義でした。

この講義では、実際の臨床場面をイメージでき、言語聴覚士の専門性について深く学ぶことができました。また、実際の患者さんに検査やリハビリテーションを適切に行うためにはどんな勉強が必要なのかを改めて認識しました。

本専攻科の魅力は講義の中で学ぶだけではなく、得た知識を実際に使いながら学ぶことができる点だと思います。

社会人経験を持つ方も多くクラス全体的に勉強に対するモチベーションが高く、今までの経験からそれぞれの得意分野があり、お互いに協力しながら勉強することができるのも本専攻科の魅力です。この充実した環境の中、国家資格を取得し、患者さんの笑顔を引き出せる言語聴覚士になりたいです。

2年間の学修の流れ

1年次　行き届いたアドバイザー制度のもとで言語聴覚療法の基本から専門までを修得します。

専門基礎科目

【必修】
- ●医学総論
- ●解剖学
- ●生理学
- ●病理学
- ●内科学
- ●小児科学
- ●リハビリテーション医学
- ●耳鼻咽喉科学
- ●臨床神経学
- ●精神医学
- ●形成外科学
- ●臨床歯科医学･口腔外科学
- ●音声言語･聴覚医学
- ●中枢神経機能学
- ●生涯発達心理学
- ●学習･認知心理学
- ●心理測定法Ⅰ
- ●心理測定法Ⅱ
- ●言語学
- ●音声学
- ●音声情報処理学･聴覚心理学
- ●言語発達学
- ●リハビリテーション入門
- ●リハビリテーション概論
- ●リハビリテーション概論演習

専門科目

【必修】
- ●言語聴覚障害学概論
- ●言語聴覚障害学演習Ⅰ
- ●言語聴覚障害学演習Ⅱ
- ●言語聴覚障害診断学
- ●失語症･高次脳機能障害学
- ●失語症学
- ●失語症学演習
- ●高次脳機能障害学
- ●成人言語障害学演習
- ●言語発達障害学Ⅰ
- ●言語発達障害学Ⅱ
- ●言語発達障害学演習Ⅰ
- ●発声発語障害学
- ●運動障害性構音障害学Ⅰ（基礎）
- ●摂食･嚥下障害学Ⅰ（基礎）
- ●聴覚障害学Ⅰ
- ●聴覚障害学Ⅱ
- ●聴覚障害学Ⅲ
- ●聴覚障害学Ⅳ

【選択】●海外保健福祉事情Ⅰ（講義）

2年次　言語聴覚療法の専門領域をまとめ臨床実習に臨みます。

専門基礎科目

【必修】
- ●臨床心理学
- ●社会保障制度論･医療関連法規

専門科目

【必修】
- ●言語聴覚障害学特論Ⅰ
- ●言語聴覚障害学特論Ⅱ
- ●言語聴覚障害学研究法概論
- ●言語発達障害学演習Ⅱ
- ●音声障害学
- ●運動障害性構音障害学Ⅱ（応用）
- ●器質性構音障害学
- ●機能性構音障害学
- ●摂食･嚥下障害学Ⅱ（応用）
- ●吃音学
- ●小児聴覚障害学Ⅰ（基礎）
- ●小児聴覚障害学Ⅱ（応用）
- ●臨床実習

1週間の時間割例

	月	火	水	木	金	土
1時限 9:00～10:30	リハビリテーション入門	失語症･高次脳機能障害学	聴覚障害学Ⅰ	リハビリテーション概論	聴覚障害学Ⅱ	言語発達障害学Ⅰ
2時限 10:40～12:10	病理学	リハビリテーション概論		失語症･高次脳機能障害学		
3時限 13:00～14:30	内科学	生理学	中枢神経機能学	学習･認知心理学	解剖学	――
4時限 14:40～16:10	失語症学	臨床歯科医学･口腔外科学	――	心理測定法Ⅰ	音声情報処理･聴覚心理学	――
5時限 16:20～17:50	医学概論	生涯発達心理学	――	リハビリテーション演習	音声学	――

特色ある授業（演習･実習）

成人言語障害学演習

失語症や認知症、摂食嚥下障害を抱えた症例に対する訓練や指導を自分たちで考え、報告します。学修した評価方法を基に問題を探索し、指導方法を考え、訓練や指導の効果を検証できる力を育てます。

小児聴覚障害学Ⅱ（応用）

通常の言語発達を基に聴覚障害児の言語力を評価し、発達段階に応じた聴覚検査を用いて補聴器や人工内耳の装用状況を把握し、言語コミュニケーション能力を育てるための訓練プログラムを立案します。聴覚以外の発達障害や知的障害を併せ持つ場合の対応についても学修します。